青春の蹉跌

石川達三

新潮文庫

新潮文庫

青春の蹉跌

石川達三著

昭和四十六年五月二十日　発行
昭和四十九年九月十日　十八刷

著者　石川達三
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替　東京八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊐ 印刷・錦明印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Tatsuzô Ishikawa 1971　Printed in Japan

新潮文庫

青春の蹉跌

石川達三著

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

青春の蹉跌（さてつ）

一

裏街の小さな居酒屋の、土間に置いたテーブルを囲んで、彼等はいつものように安い酒を飲みながら、三時間以上も議論をした。そういう店が居心地のいい場所であったし、そして彼等には（身分相応）でもあった。四人とも法律を勉強している大学生で、理窟っぽい青年たちだった。だから彼等のはてしのない議論はほとんど抽象的で、観念的だった。社会がどうの、政治がどうの、そしてまた人生がどうの、革命がどうの……。

議論の根柢にある想念は、青春の明るい希望にみちたものではなくて、むしろ絶望的なものだった。三宅は左翼学生であったから、来たるべき革命の日を、情熱をこめて語っていた。けれども革命を待望する彼の気持は、現在の社会に対する絶望にほかならなかった。未来の革命を信じるよりほかには、今日を生きることの意味がなかったのだ。

とにかく資本主義を倒すことだ。そのためには革命的青年を育成しなくてはならない。つまり社会革命の前に、まず人間革命が必要なんだ。

人間革命は誰がやるんだ。

それは教育だ。教育だけしか無い。

その教育は現在の資本主義政治のもとで行われることになる。従って強権の弾圧も当然覚悟しなくてはならない。

人間革命はいつになったら出来あがるんだ。二十年か。三十年か。もっとかかるだろう。簡単なことじゃない。

では五十年か。つまり俺(おれ)たちが生きている間には革命はおこらないわけだ。資本主義がそれまで続いて行く。死んだあとで革命がおきて立派な共産社会ができたにしても、それは吾々(われわれ)とは関係ない。

関係はあるさ。吾々が革命の基礎を造っておいてやるんだ。おれたちがやらなかったら、誰もやる者はない。

僕は本質的なところで疑問をもっている。ロシヤ革命の実例を見ても、共産社会というものは人間性を無視している。反自然的で反人間的だ。自由の否定、私有財産の否定……。

人間性などというものは一定不変のものじゃないよ。だから人間革命が必要なんだ。

言葉、言葉、言葉……。言葉だけがからまわりしていた。現実の社会はまだ彼等から遠いところにある。彼等は本を読み、人の話を聞き、頭で考えて、社会と革命とを手探りしているのだった。革命の流血も混乱も、人民の苦難も、観念的な一つの美として感じられているばかりだった。殊(こと)に左翼学生三宅の頭の中では、戦争を描いた大きな壁画が一つの美術品であるように、革命のなかに巨大なそして惨酷(ざんこく)な美を幻想していたようであった。

革命によっておれたちの新しい社会を造るのだと、三宅は言った。現在の社会は（おれたち）のものではなくて、他人の社会として感じられているのだった。彼は他人の社会で生きている居心地の悪さに、腹を立てていた。そして大部分の民衆がすべて彼と同じように、居心地のわるい思いをしているものと信じていた。

民衆のために革命は絶対必要だと、三宅は言った。しかし本当は民衆のためではなくて、彼自身のために必要なのかも知れなかった。社会というものは……

社会というものはいつの時代にも、大人たちのものだった。大人になりきらない青年たちにとっては、一種の違和感がある。肌になじまない窮屈さがある。三宅はそれを政治のためだと考え、資本主義が悪いからだと論じていた。裏街の居酒屋で酒を飲んでいる時でさえも、そのことを誰かに咎められはしまいかという警戒心があった。つまりこの街が民衆の街ではなくて、（資本主義の街）だからだと三宅は思っていた。しかし本当は彼等青年の街ではなくて、（大人の街）であったから、そのために、居心地が悪いのかも知れなかった。

十二時を過ぎて、江藤は友達とわかれ、ひとりで電車に乗った。電車は高いところを走っていた。ひろい夜の街が低く窓の外をながれて行く。夜がふけて、街の灯の色に一日の疲れが見えた。疲れておりながら、まだ何かに耐えている姿だった。

窓から見える範囲に、何十万という人が住んでいる。それを江藤は眼を据えて見ていた。電車がどこまで走っても、無数にひろがる家々の灯は終りにならない。そこにもまた何十万という人

が住んでいる。人間で埋まった曠野、人間の顔と体とをぎっしりと敷きつらねた生臭い平原。……その夜景から、江藤は一種の圧力を感じていた。彼等の意志、彼等の要求、彼等の怒り、かなしみ、嘆き、そして彼等の闘い。

これが社会だと、彼は思った。愚劣な社会、低俗な社会、そして猥雑な社会だ。しかし彼自身、現にこの社会に住み、これから先の何十年をこの中で生きて行かなくてはならない。それは先天的な宿命であり、彼に与えられた一つの地獄だった。常識的に考えて、彼の住む土地はどこにも用意されてはいない。経済生活を支えるための収入は、激烈な闘いによってのみ獲得される。資本主義社会は弱肉強食を当然とする社会でもある。

だから、この街に住む無数の人間は、ことごとく江藤の敵だった。味方はひとりも居ない。その敵の大群から、彼は漠然とした圧力を感じていた。しかしこれらの敵は、敵そのものが分裂している。森の中の木立のように、彼等はみな孤立している。彼等が孤立しているということが、江藤にとって一つの救いだった。そこに伐り込んで行ける隙があるに違いない。

けれどもこの社会はまだ、彼にとって直接的な加害者ではなかった。あと二年たてば大学を卒業する。いわゆる社会人となる。その時から本当の闘いが始まる筈だった。準備期間は二年しかない。そのあいだに社会人としての資格をつくり、実力をたくわえ、狡猾さと図太さとを身につけなくてはならない。

（革命なんか来やしない）と彼は信じていた。三宅は来ると思っている。それは予想ではなくて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

単なる想像にすぎない。おそらく社会はまだ五十年も六十年もこのままで過ぎて行くだろう。絶望的な、悪い社会だ。しかし絶望的であろうが無かろうが、社会がこういうものであるのならば、この社会の中で生きて行く方策を立てなくてはならない。人生は空想ではないのだ。……

夜ふけの電車に乗っている人たちは、みな何かしら姿勢が崩れていた。しどけなく疲れている人、窓にもたれて眠っている人、酔っている人。一日の終りの弛緩した時間をのせて、電車はまだ街の上を走っていた。江藤賢一郎も酔うていたが、酔った頭のなかでまださっきの論争を続けていた。

（君の考え方は若気の至りだな）と彼は三宅にむかって言った。（生きるということは即ち妥協することじゃないか。君は現実と妥協することの意味を誤解している。現実を否定し、現実の社会を敵にまわそうとしている。しかし君、一体現実を否定するって、どんな事だ。そんな事が可能なのかい。君がいくら否定したって、現実は眼の前に厳然として存在しているじゃないか……

君は革命家になるつもりらしいが、おれたちはまだ学生だよ。現実の社会なんて、本当はまだ体験されてはいないんだ。……革命というのはね、被害者がやることだよ。ところが君はまだ被害者でも何でもない。もっと現実を体験する必要があるよ。自分で働いて、安月給で貧乏暮しをして、社会の下積みにされて、被害者になって、それから革命を考えればいいんだ）

（お前は現実主義者の妥協主義者だ）

（あたり前さ。現実以外に何がある。君の言うことは左翼観念論だ。観念をいくら捏ねまわした

って、何も結論は出て来ないよ）

三宅に指摘されるまでもなく、江藤は自分を現実主義者だと思っていた。そして観念的革命主義者の敗北を信じ、自分の勝利を信じていた。革命運動そのものを否定するのではない。それは人類の救済のために貴重な活動であるかも知れない。けれども革命家の多くは悲惨な生涯を送るに違いないのだ。現実主義は卑怯だと三宅は言った。卑怯であるかも知れない。しかし江藤賢一郎はたった一度しか経験し得ない自分の人生を、悲惨な生き方をしたくはなかった。幸福はどこにでもある。それを合法的に手に取ることは俺の自由だ。

生きることは闘争だ。平和なんかどこにも有りゃしないと、彼は思っていた。平和を叫ぶやつの大部分は敗北者だ。勝利者たちは人を押しのけ、打ち倒し、奪い、自分の場所をつくり、場所をひろげ、それから安全な砦を築き、その安全な場所にいて、平和論者の悲痛な叫びを、微笑をうかべながら静かに聞いている。それが現実であり、その事実はどうすることもできない……。

江藤は野心にみちた青年であった。三宅のような革命的野心ではなくて、個人的な野心を胸一杯にもっていた。容姿に自信があり、健康に恵まれ、学業成績も優秀であった。したがって電車の窓の外の広大な夜景から感じられる一種の圧力に対しても、敗北感や絶望感はなかった。彼は法律を専攻していた。その学問が、これから後、社会の巨大な渦潮のなかを巧みに乗りきって生きるために、充分に役に立つ筈だった。彼はその学問を個人的な生活の武器として、身につけなくてはならないと考えていた。

電車を降りて駅の外に出ると、冷たい冬の風が吹いていた。駅前から続く貧弱な商店街はみな灯を消し戸を閉ざしていた。戸は閉ざされているが、その奥に人の気配がある。家ごとに、男が居り女が居り、そして子供が居る。そこに家庭があり、人間の生活がある。その生活の上に、まるで黒い雲のように、国家の法律が重く掩いかぶさっているのだ。

江藤は煙草をくわえ、高い足音をひびかせてこの街を歩きながら、眼に見えない法律の重さを考えていた。街の人たちは眠っている。眠っている間にも法律は彼等を拘束している。一体どれだけの法律が彼等の行動を規制しているだろうか。商法の中のたくさんの条文、有限会社法、手形法、商業登記規則、それから彼等にとって最大の悩みの種の税法。民法の方では地上権に関する法律。債権債務に関する法律。親族法と相続法。婚姻法と戸籍法。借地借家法。義務教育法。行政法の方では道路法、道路交通法があり、建築基準法があり、さらに業種によっては薬事法とか医師法とか、公益質屋法とか食品衛生法とかの取締りを受け、そのうえ経済関係の無数の法律が彼等の生活にからんで来る。おそらく一軒の商店の主人の、生活と営業とに関連をもつ法律条文の数は、一万条、一万五千条にも達するに違いない。

けれども彼等民衆の大部分は、ほとんど法律を知らない。知らない法律によって彼等は拘束される。したがって彼等は法律というものに幼稚な敵意をもっているらしい。法律は民衆を保護するものではなくて、民衆に損害を与えるものだとしか思っていない。

それは彼等の無知、あるいは怠惰から来たものだと、江藤賢一郎は思っていた。法律がなくては民衆統治は不可能だ。法律は統治の基準であり、社会の秩序である。いわば地上につくられた道路のようなものだ。この道路にしたがって行けば、百里の道も易々と行ける。しかし法律を知らない民衆は、道路のない所を歩こうとして、崖にぶつかり谷に落ちこみ、自分で四苦八苦しているのだ。

地上の道路を知り尽すように、法律を知りつくした者は、法律を味方につけることができる。法律を味方につけたものが、人生の勝利者となるのだ。三宅は革命を志している。彼はみずから現行法を敵に廻そうとしているのだ。法律は彼の行為を許しはしないだろう。内乱に関する罪、公務執行を妨害する罪、逃走の罪、騒擾の罪、爆発物取締規則、破壊活動防止法。……国家はあらゆる準備をととのえて、革命行為を弾圧しようと、網を張って待っているのだ。

三宅はあの革命への意志を抛棄しない限り、生涯その住所を定め得ず、安定した職業をもつこともできず、常に陰謀をめぐらし、常に逃げまわり、いつも貧乏で、家族との団欒の時もなく、痩せて、とげとげしい眼つきをして、人を疑い、人を裏切り、あげくの果ては刑務所の独房に入れられて、ようやくそこで安定した日常を過すことができるというようなことになるだろう。

三宅は聡明で俊敏な男だった。彼が革命家となることをやめて、一般社会で生きることになったら、（おれはあいつに叶わないかも知れない）と、賢一郎は思っていた。だから三宅が左翼運動をやっている限り、江藤はこの競争者について、安心して見ていることができるのだった。

郵便局の角をまがると、道は急に暗くなり、そこからは住宅街だった。角から二軒目は町田歯科。母が治療に通っているところだ。その隣は大谷石の塀をめぐらして、庭木の茂った、平野という家。どこかの重役で、毎朝大きな外車が彼を迎えに来る。向いの柳井の息子は中学まで同級だったが、高校の試験に失敗してから不良化して、どこかへ行ってしまった。

柳井から一軒おいて松本。小さなけち臭い家。この家の娘も同級生であったが、去年の春私生児を産んだ。なぜ産児制限の手術をしなかったのか。理由はわからない。法律的には私生児とは言わないで、（母の子）と言う。変な言い方だ。それでは嫡出の子は（父の子）と言わなくてはならない。松本の娘はちかごろ見かけなくなった。子供といっしょにどこかへ雲がくれしたらしい。その向いの河田は三年ほど前に火事で焼けて、前よりも大きな家を建てた。四ツ角の野島は一昨年だったか、夫人が睡眠薬自殺をした家だ。……これが（世間）というものかも知れない。

この平凡な住宅街でも、いろいろな事件がおこっている。生きることの悩みと、生きることのむずかしさ。事件はおこっても、みんな気を合わせて、一日も早くそれを忘れようとしているらしい。或いは忘れたふりをしているのか。結局、人間が仕出かす事件などというものは、すべて有り来たりで平凡で、無数の前例がある。だから事件の善後処置もちゃんとやり方がきまっていて、誰もがその仕来たりに従う。法律規則と、かねと、習慣とで、何もかも無事におさまって行く。まっ白い猫が、まるで幻のように音もなく、ひらりと彼の足もとを流れて、生垣の穴に吸いこまれて行った。

松本ゆみ子にはちょっと心をひかれたことがあった。赤っ毛で、色の白い、すこし下がり眼の、そばかすの多い娘だった。恋をしたというのではなくて、いたずらをしてみたかった。そういう風な誘惑を感じさせる娘だった。江藤が結局なにもしなかったのは、彼に経験が無かった為だった。つまり彼女を誘惑する手順や方法を知らなかった。もう一つは、誘惑してから後の処置に自信がなかった。女に喰い下がられたら、出世のさまたげになるに違いないと思われたのだ。それを誰かがやってしまった。彼は一つの可能性を取り逃がしたと思っていた。

良い機会に、女を経験する必要がある。それがどんなものであり、どんな行為であるかは、ほとんど解っていた。つまり知識として知っていた。体験は無い。現実の社会がまだ遠いところに在ると同じように、女も遠いところに居た。女は社会の中に居る。けれども女は社会の裏だけに住んでいるのかも知れない。それとも女は男の生活の裏面に住んでいると言うべきだろうか。歩きながら、彼は女を幻想し、幻想の女を存分に手さぐりしていた。夜の暗さが幻想を助けてくれるようだった。

体が冷えると、却って酒の酔いが頭の方にあがって来る。結婚はまだ、ずっと先だと、彼は思っていた。寝静まった街は表面だけは平和だった。つまり生存競争がひと休みしていたのだ。

時計は一時になろうとしていた。母は炬燵にはいって、自分の着物の縫い直しをしていた。手は針を動かしながら、頭の中では三時間ちかくも息子の帰りを待っていた。かつてはこのように

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com